

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370891

研究課題名(和文) 渡来系資料からみた東国古墳時代の交流ルートの解明

研究課題名(英文) The Exchange Routes of Kofun Period seen from The Korean Peninsula-type Remains in East Japan

研究代表者

日高 慎 (HIDAKA, Shin)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：70392545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：東国において奈良・平安時代に著しく増加する溝もち掘立柱建物が、古墳時代に伝わった大壁建物の変形である可能性は指摘されてきたものの、未だ集成研究がなかった。そこで今回の研究において東国においてこの種の建物を集成したところ、溝が全周するもの、列状になるもの、柱間を溝でつなぐものがあり、それぞれ45例、43例、164例となった。これらの遺構が官衙関連、寺院関連とその周辺に所在することから、渡来人が東国へと招聘された結果であると考えた。また、奈良時代にはL字竈と呼ばれる朝鮮半島由来の竈が突然武蔵国府と武蔵国分寺周辺で出現することも、同様に理解できると思われる。

研究成果の概要(英文)：Although the possibility that the grooved pillar structure which is significantly increased during Nara and Heian period in east japan area was a deformation of the wall standing building in Kofun period was pointed out, there was no aggregate research yet. So in this research we have assembled this kind of building in east japan area, there are things that make the whole circumference, grooves, things that connect in columns, and 45, 43 and 164 respectively. It was. Because these remains are related to government officials, temple related and its surroundings, I thought that the result was the invitation of migrants from Korean Peninsula. In addition, it seems that in the Nara period, it is possible to understand that the furnace of the originating from Korean Peninsula called L-shaped furnace suddenly appeared around Musashi Kokufu and Musashi Kokubunji.

研究分野：考古学

キーワード：渡来系資料 古墳時代 奈良・平安時代 東国 溝もち掘立柱建物 陸上交通 交流ルート 水上(海上)交通

### 1. 研究開始当初の背景

日本の古墳時代には朝鮮半島を含め、中国大陸さらにはユーラシア歴史世界との交流の中で古墳時代の文化が成立した。ともすれば、古墳時代の研究は近畿地方の中心地の研究をおこなうことで日本列島全域を理解しがちである。東国(東日本)にもそれらの渡来文化が伝播していたことが漠然と議論もされてきたが、いまだそれらの基礎資料の把握はできていない。

### 2. 研究の目的

本研究では、東国における渡来文化(渡来系資料)を発掘資料のなかから把握し、その流入ルートについて考察を行うものである。古墳時代の文化がどのようなルートでもたらされたのか、陸上のルート・海上のルート・河川のルートなどの違いを示して新たな古墳時代像を提示することを目的とする。

#### 渡来系資料(物質資料)

陶質土器、韓式系土器、多孔甑、タタキの埴輪および初期須恵器

鑄造鉄斧および特殊な農工具類(サルボ・新羅斧など)

国産以前の馬具さらには国産化されて以降にも朝鮮半島の影響がみられる馬具

馬の生産(馬骨・牧を含む)

特殊な玉類(重層ガラス玉、黄色の発色をもつ玉など)

#### 渡来系資料(遺構資料)

L字竈

大壁建物(溝もち掘立柱建物)

これらの他にも、節大刀のなかにも朝鮮半島製と思われる資料があるし、人物埴輪や馬形埴輪などにも朝鮮半島由来の服装や器物を模したのものも含まれる。

### 3. 研究の方法

研究の目的において提示した ~ までの資料は、一部集成研究が行われているものもあるが、特に ~ については研究者間の共通認識になっていないこともあるが、まったく集成研究がおこなわれていない。研究を進めていくにつれて、まず ~ をしっかりと集成しなければならぬとの認識に至った。そこで、各地の教育委員会が発行している報告書から渡来系資料としての、L字竈、大壁建物(溝もち掘立柱建物)を抽出し集成することとした。

遺跡から出土する遺物とは、渡来系資料であれ、日本列島産資料であれ、当たり前のことだが最終的に廃棄(取り残された場合も含む)あるいは埋納・副葬されたものである。それらを単独で理解しようとするれば、日本列島内でどのような来歴をもって最終の場所に至ったのかを認識することは難しい。つまり、渡来系資料であれば、日本列島の何処から入ってきて、その後どのようなルートを通して最終的な場所にたどり着いたのかは不

明とせざるを得ないのである。しかし、同様な資料の日本列島内での分布(出土地)を見ていくことで、どのようなルートを辿ってきた可能性が高いのかを推定することはできると思われる。さらに、本研究で取り上げる遺構としての渡来系資料は、渡来人を理解する上で重要である。宝器的な意味合いを持って移動する可能性がある遺物よりも、直接的に渡来人を指し示すと考えられる。その意味で遺構の集成研究が急務なわけである。

### 4. 研究成果

前述のように、渡来系資料としての遺構の集成が急務であり、これまでまとまった形でのものがない。そこで、東国におけるL字竈、全周溝もち掘立柱建物を報告書にまとめて提示することとし、科学研究費助成事業研究成果報告書『渡来系資料からみた東国古墳時代の交流ルートの解明』研究代表者日高慎を2018年3月に刊行した。

集成図版編の1 東国におけるL字竈集成、2 東国における全周溝もち掘立柱建物集成である。ただし、遺構図未確認のものは図版を割愛した。

また、一覧表は、表1が東国におけるL字竈、表2が東国における溝もち掘立柱建物集成としてすべての溝もち掘立柱建物、表3が東国における全周溝もち掘立柱建物集成、表4が東国における列状溝もち掘立柱建物集成、表5が東国における柱間溝もち掘立柱建物集成である。

集成図版および表1~5については、大部になるので、刊行した報告書を参照していただくこととしたい。以下の記述における表1~5は、刊行した報告書に掲載したものであることを予めお断りしておく。

L字竈は滋賀県の琵琶湖周辺、奈良県南部、北部九州および石川県地域に集中するが(松室1996、川崎2014)、それ以外の地域では点在する在り方を示す。古墳時代から飛鳥時代にかかる時期のものが多いが、奈良時代に位置づけられるものも存在する。東国においては、群馬で1例、東京で2例が知られるのみである。

今井学校遺跡9号住居は松室分類B類、武蔵台東遺跡38号住居はC類、武蔵国府第1468次4号住居はC類である。奈良時代あるいは7世紀後半以降の例は、寺院造営に関連したものである場合が多いようであるが(松室前掲:p.170)、武蔵台東遺跡・武蔵国府跡例については、前者は武蔵国分寺、後者は武蔵国府(役所)に関連してL字竈をもつ住居で生活していた渡来人が存在していたことを示していると言えるだろう。

ところで、川崎保は長野県を中心とした地域でオンドル状遺構が存在することを明らかにした(川崎2014)。いわゆるL字竈ではなく「コ・ロ」字状を呈する屋内に煙道をもつものである。いずれも奈良時代から平安時代にかけての資料である。このようなコ・ロ

字状竈の系譜については、日本列島でのL字竈からの発展を考えることは難しく、突如出現しているところに特徴がある。東アジアに目を転ずると渤海や女真などに見られる炕に系譜を求める川崎の考えは理解できる。川崎が指摘するように、埼玉県鳩山町鳩山窯跡群においても同様な屋内煙道をもつ住居がみつかり、須恵器・瓦生産において、渡来人がいたことを端的に示しているということだろうか。

奈良時代に発見されるL字竈、そして可能性として川崎が提示したコ・ロ字状竈とされた資料の存在は、このころに改めて東国地域に配置された渡来人がいたことを具体的に示していると理解したい。鳩山窯跡でみられることを考えると、その渡来人は、様々な技術者として東国の地にやってきたのではなかろうか。そして、役所や寺に付随するように存在する在り方は、次に述べる大壁建物としての溝もち掘立柱建物と不可分であると考えている。このことからすれば、今後、各地の官衙遺跡周辺においてL字竈付き住居が発見される可能性は高いと思われる。

古墳時代を中心とした大壁建物は、琵琶湖周辺と奈良盆地南部に集中して検出されている(花田 2000)。この種の建物が初めて検出されたのは滋賀県であり、調査に関わった林博通らにより研究がスタートした。林は当初切妻大壁造り住居としたものを大壁造り建物Aタイプ、掘立柱建物であるが、柱筋に浅い布掘り溝を巡らすものを大壁造り建物Bタイプと呼び、Aタイプのうち棟持柱をもつものをA-1タイプ、ないものをA-2タイプとした(林 1997)。このなかでBタイプとされた建物については、「溝がなければ通常の掘立柱建物とは区別がつかず、調査時点ですでに溝は消失してしまっている場合も多いとみられる」(林前掲:p.321)とされ、検出状況によって本来ならば全周していた溝が、部分的に残っているだけの場合もあることを指摘していることは極めて重要である。そして、これらの大壁造り建物の起源を、韓国公州市艇止山遺跡などの大壁造り建物に求めたのである。

中田英は、奈良時代以降の関東地域の掘立柱建物をA坪掘、B布掘、C「溝もち」と分類し、溝もち掘立柱建物が柱穴と柱穴をつなぐように溝が掘られているとしたのである(中田 1983)。B布掘とC「溝もち」の違いとしては、前者は溝が一定方向に掘られることが多いが、後者は平側・妻側の両方向に掘られるものやL字状に溝がつながっているものもみられるとした。これらの建物は、神奈川県を中心に奈良時代から平安時代にかけて多くの類例があることを示した。また、壁構造についても、丸太材などの板壁であった可能性を説いたのである。中田は溝もち掘立柱建物として神奈川・群馬・栃木・静岡などの事例を示しているが、特に神奈川県では中田の論考以降も確実に類例が増えているし、関東あ

るいは東北など東日本全域で類例が確認できる。

さらに中田英は、溝もち掘立柱建物のなかでも溝が全周するタイプについて、溝が全周するものとそうでないもので上屋構造にも異なる部分があった可能性を考え、改めて神奈川県内の18例の全周するタイプについて考察した(中田 2005)。それぞれの遺構やその周辺から渡来系遺物はほとんど見つかっていないが、栃木県宇都宮市西下谷田遺跡の柵による方形区画に取りついた八脚門とされたSB-10が全周はしないものの溝もち掘立柱建物であり、方形区画内から新羅土器や陶質土器などが出土していることから、中田は「七世紀中葉まで大津北郊を中心に展開された大壁造り建物、それを構築する技術をもった渡来人の集団、あるいはその技術が七世紀後半の相模の地に伝えられ、郡衙跡の正倉や一部の建物、大規模集落の大型掘立柱建物の柱掘りかたとして」(中田前掲:p.590)採用されたと考えたのである。

中田英らのいうように、奈良時代から平安時代にかけて、この種の建物が東国各地で出現するということが何を意味するのだろうか。そこで、まずは集成をしなければならない。上記の諸研究で述べられたように、柱穴の掘削方法や壁構造をもとに分類をすることができれば良いのだが、明確に溝と柱穴の掘削方法の関係が把握できるものは極めて少ない。上面での確認のみである場合や土層図のないものもあり、発掘調査報告書にそのような記述があるとは限らない。そこで、溝と柱穴の掘削方法の関係はいったん度外視することとし、溝もち掘立柱建物の溝について着目し、柱穴と柱穴をつなぐものを柱間溝もち掘立柱建物と呼び、いわゆる布掘状に梁行や桁行方向に複数の溝が通っているものを列状溝もち掘立柱建物と呼んでその条数を表4に記載し、溝が全周するものを全周溝もち掘立柱建物と呼ぶこととした。

列状および全周溝もち掘立柱建物に関して、これ以上の溝はないと考えられる。柱間溝もち掘立柱建物については、神奈川県平塚市向原遺跡52号は溝でつながった柱穴の位置がずれている。このような例は、当時の地表面が削られた結果として溝の浅い部分が失われてしまった可能性もあり、本来は列状(2条)であったのかもしれない。また、一部つながっていないものの全周に近い場合もあるが、これなども本来は全周していたのだが、溝の浅い部分が失われた可能性もあろう。あるいは、規則的に2本の柱穴を溝でつないでいるものなども存在する。これらをさらに分類することもできるだろうが、今は、上記の3分類にとどめておくこととし、まずは確実に全周溝もち掘立柱建物のみを抽出することとした。もっとも集成作業としては、柱間溝もち掘立柱建物、列状溝もち掘立柱建物、全周溝もち掘立柱建物すべてを管見の限りで集めることとした。

表2として東国におけるすべての溝もち掘立柱建物集成を示した。宮城県から静岡県までのもので管見に触れた限りのものを示した。計241例の溝もち掘立柱建物となるが、これらは上述した各氏の諸研究を統合するとともに、報告書等で確認したものを示している。おそらく地域の中では著名な遺跡・遺構が洩れている可能性もありうる。神奈川県での類例の多さが際立っているが、これは1970年代から溝もち掘立柱建物の類例が確認されていたことにより、発掘調査において注意して検出作業を行っているという側面もあるだろうが、それだけではないと思われる。あまり意味はないかもしれないが、県ごとに数を抜き出してみると、宮城県6例、山形県4例、茨城県6例、千葉県16例、栃木県3例、群馬県18例、埼玉県21例、東京都9例、神奈川県144例、長野県12例、静岡県2例である。関東地域ではすべての都県で検出されている。

表3として全周溝もち掘立柱建物の類例を示した。計44例であり、宮城県2例、山形県3例、群馬県1例、埼玉県7例、東京都2例、神奈川県29例である。確認された地域は限定されるものの、東北から関東の広い地域で確認できることがわかるだろう。

表4として列状溝もち掘立柱建物の類例を示した。計43例であり、宮城県4例、山形県1例、茨城県3例、千葉県12例、栃木県2例、群馬県7例、埼玉県2例、神奈川県10例、長野県2例である。全周溝もち掘立柱建物よりも多くの地域で確認できる。列状溝もち掘立柱建物については、柱間溝もち掘立柱建物と組み合っているものが一定数確認される。43例中8例にあり、茨城県、群馬県、神奈川県、長野県で確認できる。列状溝もち掘立柱建物と柱間溝もち掘立柱建物との近縁性を物語っていると思われる。

表5として柱間溝もち掘立柱建物の類例を示した。計161例であり、茨城県4例、千葉県4例、栃木県1例、群馬県13例、埼玉県12例、東京都7例、神奈川県108例、長野県11例、静岡県1例である。東北で確認できない以外はすべての都県で確認される。

遺跡ごとの特徴をみると、全周・列状・柱間すべての溝もち掘立柱建物が見ついている例として、埼玉県所沢市東の上遺跡があげられる。その多くが総柱建物であり、建物の用途については共通することが予想されるが、それぞれ近しい構造の建物であることが考えられる。また、神奈川県平塚市天神前遺跡7地区、同十七の域遺跡4地点があげられるが、これらはいずれも残存状況が悪いので、柱間溝もち掘立柱建物としたものが列状溝もち掘立柱建物あるいは全周溝もち掘立柱建物になる可能性もある。全周溝もち掘立柱建物と列状溝もち掘立柱建物がみられるのは、宮城県大崎市一里塚遺跡、同名館官衙遺跡、山形県川西町大夫小屋1遺跡、神奈川県平塚市大会原遺跡3地点、同十七の域

遺跡4地点などがあげられる。全周溝もち掘立柱建物と柱間溝もち掘立柱建物がみられるのは多くの例が認められる。以上のような傾向を考えると、全周・列状・柱間溝もち掘立柱建物は相互に関連している建築構造であると理解できるだろう。

一方、全周溝もち掘立柱建物のなかで、総柱建物になるものが一定数存在する。例えば、埼玉県深谷市下郷遺跡12次1号、同熊野遺跡10・11次1号、同所沢市東の上遺跡45次SB01・SB02、東京都北区御殿前遺跡22号、神奈川県川崎市橘樹郡衙跡SB0030などである。これらは、表3のなかの総柱にならない側柱建物とは別に捉えたほうがよいかもしれない。先にみた3者が存在した東の上遺跡では、総柱にならない20次SB01が存在するものの、他の溝もち掘立柱建物と同じ正方形となっており規模もほぼ同じなので、いわゆる長方形プランの全周溝もち掘立柱建物(側柱建物)とは別に捉えたほうが良いだろう。大上周三が述べた掘込地業としての溝もち掘立柱建物の類例という評価をすべきなのかもしれない。

全周溝もち掘立柱建物で筏地業をとともなう山形県川西町大夫小屋1遺跡985遺構・986遺構については、青柳泰介が指摘したように日本海ルートでの北陸地域との関係で理解できるのかもしれない(青柳2012・2016)。

列状溝もち掘立柱建物43例中、総柱建物は25例であり、高い頻度を有している。常陸国衙跡では礎石が存在するし、日秀西遺跡では版築が存在する。地盤を強化するための工法として列状に溝を配した掘込地業なのかもしれない。多功遺跡における8条(3×7)および造り替えられたとされた10条(3×9)の総柱建物は、破格な大きさであり、これが1棟なのかどうかも含めて建物の性格は未詳である。礎石そのものは残っていなかったが、付け加えられた2条の溝とそれ以前の掘立柱建物の柱を抜いた後に版築を施しているとされているので、倉庫なのかもしれない。この建物の南側には隣接して掘込地業を施した礎石建物のSB2401があり、南北筋の両端がSB525と合っている。いずれにせよ、本例を含めて3条以上と2条ないし1条の溝もち掘立柱建物とは、別に捉えたほうがよいように思われる。正方形あるいは正方形に近いものと、長方形の側柱建物を別に捉えたほうがよいのは、先にみた全周溝もち掘立柱建物と同様である。

列状溝もち掘立柱建物と柱間溝が同一遺構で確認されたのは、8例があることは前述した。茨城県水戸市台渡里廃寺26次T7-006、群馬県藤岡市下大塚遺跡1号、同上栗須A遺跡B-4号・B-6号、神奈川県平塚市原口遺跡H2号、同海老名市本郷遺跡KE地区11号、長野県飯田市恒川遺跡群(薬師垣外)正倉ST05などである。これらは、両者の近縁性を示していると理解できようが、総柱建物の上栗須A遺跡B-6号、恒川遺跡群(薬師垣外)正倉

ST05 は側柱建物とは別に捉えたほうがよいように思われる。

本研究における研究成果としてL字竈、溝もち掘立柱建物の集成結果とそれらの遺構および遺跡の諸特徴について、導き出せるのが官衙関連遺跡およびその周辺と寺院およびその周辺といったものであった。奈良時代から平安時代において、政治・文化の中心に近いところで活躍していた渡来人の存在を示していると理解したのである。当時、渡来人たちが自らの意思のみで移動したりすることは不可能であろう。そこには政治的な差配によって移動させられていた渡来人の姿を見出すこともできるだろう。『続日本紀』巻七の靈龜二年(716)にみる武蔵国高麗郡設置記事はまさにそのような在り方が記録されたものであろう。

交流ルートということとは少し異なるかと思うが、東北地域から関東・中部・東海地域にかけて存在する溝もち掘立柱建物については、青柳泰介が述べるように、太平洋側と日本海側でわけて理解したほうがよいのかもしれない。「神奈川(相模)の官衙遺跡や東北地方の城柵官衙遺跡などで渡来系集団の痕跡が見られるのは、中略、律令政府が強力に推進した征夷事業があり、その最前線に百済遺民(おそらく百済中枢地域と関わる集団)や渡来系集団の末裔が動員された」(青柳 2016 : p.42) 結果として、各地に大壁建物の末裔が作られていったと理解すべきだろう。

東海道、東山道、東山道武蔵路、北陸道などの官衙や寺院に付随して渡来人が配置されていったということを示しているのだろう。古墳時代においても後の東海道、東山道、東山道武蔵路、北陸道などのルートは存在していた可能性が極めて高いことは言を俟たない。例えば、東山道武蔵路沿いに共通する胴張り形横穴式石室が分布する在り方は、北武蔵と南武蔵との交流を端的に示していると理解できる(小野本 2008)。天王壇古墳系列といわれる口縁部が極端に短い円筒埴輪が、東山道沿いに福島県の中通りと栃木県南部に存在している在り方も(藤沢 2002)、古墳時代のルートが後の東山道ルートに重なってくることを示しているのである。

本研究で東国における溝もち掘立柱建物を不十分ながら集成した。上述したように集成洩れの多いことを恐れるが(すでに洩れがあることも確実だが)、東国の多くの地域で確認できるという事実には違いはない。この集成作業は、今後も継続していき、いつの日か完成させたいと切に願っている。

以上のように、溝もち掘立柱建物については、今後さらに検討を進めていく必要がある。中田英や大上周三が述べた壁や柱が溝もちという構造とどのような関わりがあるのか、板壁なのか、土壁なのか、両方あるとしたら、それらと溝との建物構造としての関係性などは発掘調査によって確かめるしか方

法はない。注視していきたい。

また、今回はL字竈、溝もち掘立柱建物について集成をおこなったが、先学の諸研究を統合しただけになった移動式竈についても改めて集成作業をする必要性を感じている。筑波山周辺の事例と山形市の事例が確実に古墳時代の所産であるならば、渡来系資料として再評価すべきものとなるだろう。奈良時代以降の事例についても同様に理解できるのか、考究していく必要を感じている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

日高 慎 2016 「古墳時代の女性像と首長 - 栃木県下野市甲塚古墳の埴輪をもとにして - 」『総合女性史研究』33 pp.30-43 総合女性史学会 査読有

日高 慎 2015 「埴輪にみる渡来文化」『アーキオ・クレイオ』12 pp.47-58 東京学芸大学考古学研究室 査読有

日高 慎 2015 「埴輪に表現された被葬者」『同志社大学考古学シリーズ』11 pp.445-454 同志社大学考古学シリーズ刊行会 査読有

[学会発表](計3件)

日高 慎 「栃木県壬生車塚古墳の調査とその意義」考古学研究会 第42回東京例会 2016年10月29日

日高 慎 「下野市甲塚古墳の埴輪群像 - 女性首長と機織形埴輪 - 」総合女性史学会 2015年6月13日

日高 慎 「埴輪にみる渡来文化」『第7回百済文化国際シンポジウム』pp.12-13 奈良教育大学・公州大学校(韓国) 2014年12月6日

[図書](計3件)

日高 慎 2018 『渡来系資料からみた東国古墳時代の交流ルートの解明』(平成26~29年度科学研究費助成事業 基盤研究(C)(課題番号26370891)研究成果報告書) 総 p.47 東京学芸大学自然科学系

日高 慎 2016 「盾持人埴輪の世界 - 古墳をまもる埴輪 - 」『大室古墳の教室考古学講演会・講座の記録2』pp.13-20 前橋市教育委員会

日高 慎 2015 「日本列島の関東地域および韓国における埴輪の特徴とその関係」『韓国円筒形土器(埴周土器)』pp.180-209 国立羅州文化財研究所(韓国)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

日高 慎 (HIDAKA, Shin)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：70392545

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )